

「無力」なイエス像形象のための選択：遠藤周作『イエスの生涯』におけるE・シュタウファー『イエスその人と歴史』の引用のあり方

菅原，とよ子
八女学院高等学校非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/20348>

出版情報：九大日文．17，pp.66-81，2011-03-31．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

「無力」なイエス像形象のた めの選択

——遠藤周作『イエスの生涯』におけるE・シユ
タウフアー『イエス その人と歴史』の引用のあり
方——

YOSHIMASA
T. K. A.
菅原 とよ子

一 はじめに

遠藤周作『イエスの生涯』(昭和48年10月15日、新潮社、以下、遠藤著と略記、初出は「聖書物語」、「波」昭和43年春季号、48年6月号、新潮社)には、種々の形での典拠が示されている。例えば「ルナンの『イエス伝』(31頁)のように正確に、或いはC・H・ドッドを「G・H・トッド」(154頁)のように不正確に、また或いは「学者たちのマタイ福音書の写本の研究によって」(133頁)のように、引用典拠の著者を不明瞭に、などの形である。

だが、現在、長崎市遠藤周作文学館の調査、資料公開によって、遠藤著の典拠を確定することが可能となっている。同文学館では、平成19年6月から現在も、同文学館内において、蔵書目録(以下、目録と略記)を一般公開し、また、同年同月から現在も、同文学館内において、同文学館が、遠藤による遠藤の蔵書への文字の書込み、傍線や一く数行を括るよう施した線の書込み、遠藤が折り込んだと推測される折の跡など、あらゆる

書込みや折の跡などをページごとにつひとつ写真に撮り、パソコンに写真画像として収めたパソコン写真データ(以下、パソコン写真データと略記)を一般公開している。更に、同文学館は、遠藤の旧蔵書86冊を目録化した『長崎市遠藤周作文学館 所蔵蔵書目録I』(平成20年3月27日、長崎市遠藤周作文学館、以下、『目録I』と略記)、遠藤の旧蔵書509点を目録化した『平成20年度 遠藤周作文学館所蔵蔵書目録』(平成21年3月28日、同文学館、以下、『平成20年度 目録』と略記)を発行し、遠藤研究のための貴重な資料を提供している。このような資料提供によって、遠藤著の典拠を確定することが可能となっているのである。勿論、中には、遠藤著が典拠にしたと推測されるダニエル・ロップス著、S II カンドウ、金山政英訳『キリストとその時代2』(昭和24年12月20日初版、三省堂)が、『目録I』、『平成20年度 目録』、『パソコン写真データ』に見当たらないなどの例もあるが、同文学館の調査、資料公開により、遠藤が所蔵していた書籍を確認することや、約300冊の蔵書における書込みを閲覧することができる。本論では、以上の資料を活用している。

先記したように、遠藤著は種々の形で、遠藤著の典拠を示しているが、その中で、記名の頻度の高いのはシユタウフアーである。合計6箇所、即ち遠藤著の10、46、50、98、111、129頁にシユタウフアーの名が記されている。但し、このうちの129頁には、「シユタウフアーの『イエス・キリストの時代』によつた」と記述があり、目録、並びにパソコン写真データに基づいて、E・シユタウフアー、荒井献訳『エルサレムとローマ』(昭和40

年12月20日、日本基督教団出版部が典拠だと確定できている。他の5箇所、即ち10、46、50、98、111頁については、目録とパソコン写真データから、E・シユタウフアー、高柳伊三郎訳『イエス その人と歴史』(昭和37年2月25日初版・昭和42年2月25日第4版、日本基督教団出版部、以下、シユタウフアー著と略記)が典拠だと確定している。その他、パソコン写真データからは、遠藤によるシユタウフアー著への書込み箇所総数が約80箇所にも及ぶことや、遠藤著は書込みを施している箇所だけを引用しているわけではないこと、或いは書込みを施していても、遠藤著に活かしていない場合があることなども確認できている。

遠藤著における典拠に遡った論は、まだ少ない状況であり、シユタウフアーの典拠に遡った論に限ると、天羽美代子「遠藤周作『イエスの生涯』における〈イエス像〉造形過程の一考察―シユタウフアー『イエス―その人と歴史―』の影響について―」(『高知大國文』第35号、平成16年12月20日、高知大学国語国文学会、49―58頁)が詳論としてある。この天羽の論においては、以下の4点に着目させられる。即ち、(一)「遠藤は『イエスの生涯』を書くにあたって、編年史にこだわり、その際の枠組みをシユタウフアーの『イエス―その人と歴史―』から借りたということができる」こと、つまり「『イエスの生涯』は、ヨハネ福音書の流れに即してイエスの一生の流れを設定していること、イエスがヨルダン川で受洗してから刑死するまでの期間を四年半としていること、さらに聖書には記されていない年号を作中で記している数ヶ所において、シユタウフアーの『イエス―その人

と歴史―』と一致し(中略)、時間的経過のみならず、その根拠として各所に示されている聖書の対応章節やイエスの言葉などにも『イエス―その人と歴史―』を踏襲していることがうかがえる」(以上、51頁)こと、(二)「『イエスの生涯』には、悲しげな表情をうかべるイエスの姿が随所に描写されて」おり、そのイエス像が「シユタウフアーの抱いたイメージと共通していることは、偶然の一致と見るべきであ」(以上、52―53頁)ること、(三)「遠藤はシユタウフアーよりもさらにイエスの(孤独)を強調して描いている」(54頁)こと、(四)「シユタウフアーがイエス像の一面としてイエスの無力さということを示唆しながらも、基本的にはたくさんの奇跡を行い、権威あるイエス像を主張しているのに対し、遠藤は奇跡や権威あるイエスの姿を一切排し、(無力さ)にこだわっている。無力であるがゆえにイエスである、といったような『イエスの生涯』の主張は、シユタウフアーには見られぬものであり、遠藤独自の発展と考えられる」(同頁)こと、以上である。天羽は、右の論の発表後、天羽美代子「イエス像の変革」(稲植光彦編『遠藤周作―挑発する作家』平成20年10月1日、至文堂、146―156頁)を発表している。イエス像に関するシユタウフアー著の遠藤著への影響について、前者の論の方が詳しいが、二つの論の主旨は同様である。

天羽が指摘するように、遠藤著のイエスはシユタウフアー著が記述するイエスと異なり、奇蹟を行えない(シユタウフアー著は「奇蹟」の記であるが、遠藤著は、目録、『目録I』に記載のある、エ・ラゲ訳『新約聖書』明治43年7月13日初版・昭和6年2月5日第7版、天主

公教會出版の記述と同じ「奇蹟」の記であるため、シユタウフアー著に関する場合には「奇蹟」を、一方、遠藤著に関する場合には「奇蹟」を使用・注管原。また、遠藤著は確かに、多くの箇所において、シユタウフアー著を枠組みとして活用しているが、有名な「宮きよめ」や弟子派遣の年代などのイエスの年代記や、イエスを中心とした出来事の記述には相違が見られる。「宮きよめ」の年代については、遠藤著はシユタウフアー著とは異なり、ヨハネ福音書ではなく、共観福音書を基としているのである。更には、天羽が力説するイエスの外貌についての共通性は認められない（イエスの年代記の比較、及びイエスの外貌については、拙論「奇蹟という『無力』——遠藤周作『イエスの生涯』とE・シユタウフアー『イエス その人と歴史』」、「遠藤周作研究」第三号、平成22年9月10日、遠藤周作学会事務局、14—27頁を参照されたい）。因みに、遠藤著とシユタウフアー著とともに、イエスの受洗から刑死までの期間を「四年半」ではなく、約四年二か月としている。このように、遠藤著とシユタウフアー著は、共通点も有するが、相違点も有する。

そこで、本論では、遠藤著はシユタウフアー著を典拠として、どのように引用したり活用したりしているか、即ち、遠藤はシユタウフアー著を枠組みとしてどのように活用し、また、遠藤のイエス像にふさわしい記述になるよう、シユタウフアー著の記述をどのように選択したり変更したりしているかについて、具体的に示し、遠藤が「無力」なイエス像を形象していった一過程について明らかにしたい。

二 遠藤著とシユタウフアー著——イエス像、テーマや基本姿勢の違い——

二書において着目したい点は、イエス像の違い、著書のテーマや著者の基本的姿勢の違いである。

シユタウフアー著は、訳者高柳伊三郎が、「シユタウフアーは二十年間一貫して、すでに『傾向的』である福音書内の資料のみから十九世紀的意味でのイエス伝を書くことは不可能であることを認めている。ここに様式的研究の成果が彼に与えた（中略）直接的な影響をみてよいであろう」（高柳伊三郎「シユタウフアー教授——その『人』と『神学』」、シユタウフアー著、282頁）と評するように、「十九世紀の理想は、イエスの伝記であった。それは、イエスの内的・外的生活の発達心理学的描写を、小説のような具体性や、精神の分析や、説得力をもって試みようとする。しかし、はたしてこの理想が妥当であったかどうかは問題である。だがとにかく今日では、われわれはその理想は達成できないことを知っている」（20頁、傍点シユタウフアー）として、シユタウフアー著の目指す方向性を示している。また、「事実の解釈では、キリスト者とユダヤ人ではないへん食いちがつている」（2頁）ために、「キリスト教の福音書のほかに、ユダヤ人のイエスに関する報道をも、系統的にじゅうぶん利用」（1頁）しながら、イエスの奇蹟は「歴史的事実である」（3頁）こと、「わたしはそれである」という神蹟現の定式文が「最も大胆なイエスの自己証言である」（269頁）ことを主張する。シユタウフアー

著は随所に反キリスト教的なユダヤ側の証言を根拠の一つとして、シユタウファー著が最も重視する奇跡や神蹟現の定式文を証明する。そして、シユタウファー著のイエス像を逞しく威厳に満ちた存在としている。

それに対して、遠藤著はシユタウファー著のような反キリスト教的なユダヤ側の証言を利用することを基本的姿勢としてはおらず、また、十九世紀的イエス伝の著者ではないとされるブルトマンやポルンカムなども取り上げることによつて、シユタウファー著と同様、十九世紀的ではないイエス伝を目指していると考えられるものの、シユタウファー著が回避しようとしたイエスやユダなど、人物の内面描写は、それがなくては遠藤著は成立し得ないほどの重要さである。更に、遠藤著は奇蹟を行えない「無力」なイエスが無類の愛の神であるということをし、種々の典拠を利用しながら立証していくことをテーマとし、復活をめぐる終末部において、次のように記述するに至る。

自分たちの卑劣な裏切りに怒りや恨みを持たず、逆に愛をもつてそれに応えることは人間のできることでなかつた。(中略)そして彼等はイエスが自分たちのそばにまいたいのかの如き感じがした。子供にとつて失つた母がその死後もいつも横にいる気持と同じような心理である。(248頁)

家族や友人同士、恋人同士などにおいては、「自分たちの卑劣な裏切りに怒りや恨みを持たず、逆に愛をもつてそれに応え

る」ような愛の行為に及ぶ人間は、現実に存在するのではないかと疑問にも思うが、遠藤著においては、イエスだけがそのような愛の行為を為し得るとしている。

以上のように、テーマや執筆の前提となる基本姿勢が異なると、遠藤著がシユタウファー著を引用しても、文脈が異なる場合が多いのではないかということが、まず推測される。事実、パソコン写真データによつて確認できた書込み箇所や書込み内容などが遠藤著に活かされていると確認できる箇所であっても、文脈を比較すると、異なっている箇所は少なくない。つまり、語句自体の意味は同じであっても、その語句を含む文脈が異なるなどの場合が多々あるのである。例えば、後の章「五」に詳述するように、イエス時代の「大工の多くは巡回労働者だった」(遠藤著、12頁)というイエス時代の生活の様について、パソコン写真データから、明らかに遠藤著がシユタウファー著を基に記述していると分かる箇所においても、そうである。イエス時代の「大工」が「巡回労働者」であるという、その語句自体の意味は変わらないのであるが、その語句をひとまとまりの文脈の中に置いて、その語句を捉えようとすると、文脈におけるその語句の果たす役割が変化し、二書の文脈が異なつたものになるという場合が多く見られるのである。

したがつて、二書を比較し、その文脈を確認することは、重要な作業であり、また、その作業により、シユタウファー著にはない、遠藤著に特徴的な「無力」なイエス像形象のための一過程を知ることができる。以下には、二書の比較のあり様から、

四種類に分類して、前章「一」に記した目的、即ちシユタウフアー著の遠藤著への引用のあり方、「無力」なイエス像形象のための一過程について、具体的に示していく。

三 シユタウフアー著からの引用のあり方（二）—— 語句の形や意味、及び文脈が変化していない例——

引用された語句の形や意味が同じであり、また文脈も同じだと判断できる箇所を、二書それぞれから引用し、《例1》に示す。例文には、以下の通り、記号を付す。二書において、一致する部分には点線を、相違する部分には波線を傍線として付すが、取り上げる例文の内容により、単語や語句単位で一致するかそうでないかを示す部分や単語や語句単位ではなく、内容で一致するかそうでないかを示す部分、或いはそれらを複合させて示す部分などがある。傍線の始まりには①、②、……と番号を付すが、番号を見やすくするため、文中に記す。番号の順序は遠藤著を基準とし、シユタウフアー著はそれに準じるため、シユタウフアー著の方は、番号順になっていない場合や、番号が複数回に及ぶ場合などがある。以上は、《例2》〜《例4》についても、同じである。

《例1》

・遠藤著 II ①『第一の根本的で、確実な事実』は、メシヤという概念が語録史料（聖書より前）にできたイエスの言葉を集めた史料）には、まったく見出されないといいことである。ダビデの

子、イスラエルの王、ユダヤ人の王という意味の称号についても同じことがいえる。つまり語録史料はイエスのどんなメシヤ的な自己証言も語っていないのである」とシユタウフアーは書いている。②『語録史料はイエスがメシヤと自称しなかつたという結論に至らせる』（98頁）。

・シユタウフアー著 II ①『第一の根本的で、確実な事実』は、メシヤという概念が語録史料（Q）には、まったく見いだされないといいことである。ダビデの子、イスラエルの王、ユダヤ人の王という、同じような意義の称号についても、同じことがいえる。簡単にいえば、語録史料はイエスのどんなメシヤ的の自己証言も知らないのである。しかし語録史料は、キリスト教最古のイエスに関する記録であるだけでなく、同時に、もっぱらイエスの言葉（イエスに対しての、またはイエスについての言葉ではない）を提供しようとする、原始教会唯一の書である。それだから、②『語録史料の証言は、われわれの問題にとつて根本的な意義をもち、イエス自身はメシヤと自称しなかつたという結論に至らせるものである。』（220-221頁）

《例1》については、シユタウフアー著の語句や文など、同じ表現形式を踏襲し、文脈も同じだと言える。細かな点において、①中の「意味」（遠藤著）に対して、「意義」（シユタウフアー著）というように、熟語が異なり、また、「つまり」（遠藤著）に対して、「簡単にいえば」（シユタウフアー著）、「語っていない」（遠藤著）に対して、「知らない」（シユタウフアー著）というように、表現が異なっているが、文脈に影響する記述の違いではない。

更に、遠藤著は所謂Q史料を言い換えているが、この変化も文脈に影響するものではない。②では、遠藤著はシユタウフアー著を中略しながら引用しているなどの違いもあるが、全体の文脈として、二書は一致する。

このように、引用に変化が見られないのは、「無力」に象徴される遠藤著のイエス像と、メシヤと自称しないというシユタウフアー著のイエス像が重なったためと推測することが可能である。遠藤は、シユタウフアー著が重視して記述している「わたしはそれである」というイエスの神顕現の定式文の記述箇所を書込みを施しても、遠藤著には活かしていないように、遠藤は、遠藤著のイエス像と合わないシユタウフアー著の内容については引用していない。シユタウフアー著のイエス像は、この定式文を最大の要素として、威厳に満ちた存在となつてはいるのだが、遠藤著は、それを全く引用したり活かしたりしていない。また、シユタウフアー著が最も主張をし、記述もしている事からの一つである奇跡についても、遠藤著は殆ど記述していない。みじめで「無力」な遠藤著のイエス像は、奇蹟を行い、人々から崇拜され、「わたしはそれである」と自己証言する威厳に満ち溢れたシユタウフアー著のイエス像とは相容れないからだと考えることが可能である。《例1》で取り上げたシユタウフアー著の記述内容は、みじめで「無力」な遠藤著のイエス像を裏付ける資料の一つとして、引用されたのだと考える。

《例1》のように、語句や文脈が変化していない例としては、三一年逾越祭近いガリラヤ伝道のクライマックスにおいて、人

々が救い主来臨という信仰伝統の基に、イエスをメシヤと見なしたという箇所（遠藤著88頁、シユタウフアー著124頁）など、僅かな例があるばかりである。

四 シユタウフアー著からの引用のあり方(二)——語句の形や意味は変化していないが、文脈にずれが生じている例——

文脈が変化しているというほどではないが、引用や記述の仕方によつて、文脈に少しずれが生じていると考える例の一つを、次の《例2》によつて示す。

《例2》

・遠藤著Ⅱ「①聖書がイエスの顔についてほとんど何も語つておらぬ以上我々はそれを手さぐりで想像するより仕方がない。シユタウフアーによると②当時のユダヤ教は神の教えを説く者は『背のたかい、身体強健なもの』と規定しており、③この規定にはずれた者は人々から冷たくあしらわれ、批判される習慣があつたと書いている。もしこの説が本当なら、④聖書にはイエスの外見について人人の侮蔑する記事が書かれていない以上、当時のユダヤ人としては普通の身長を持つておられたのかもしれぬ。」(10頁)。

・シユタウフアー著Ⅱ「④新約聖書は洗礼者ヨハネについて人物描写をしているが、イエスについてはしていない。そのことから結論してよいのは、イエスは、外面的にはその時代の他のパレスチナのユダヤ人と本質的に異なるところはなかつた

といふことである。こゝういふ結論は、ユダヤの反対者たちが黙認していることで確認される。③ラビたちは、正しいユダヤ人、特に教師の外貌に対しては非常にはつきりした基準をもつており、この基準にそぐわないものを侮蔑し冷酷に批評した。イエスの姿や衣服については、古代ユダヤ人の攻撃は、少しも非難に価するものを見いださなかつた。ということとは、もしイエスの外貌について知ろうとするなら、当時のパレスチナのユダヤ人の像を素描しなければならぬ、そして、ばらばらの間接的な福音書の証拠から得られるわずかな個性的特徴を加えればよいということの意味している。

②ラビたちの信念によれば、神の臨在の反映は、ただ背の高い強健な人間にだけありえた。④イエスは明らかにこゝういふ身体的資格をもつていたはずである。でなければ、反対者がイエスの外見に対して、攻撃をしないといふことはなかつたはずである。幼いイエスの満足な成長に関するルカの記録と、しばしば大急ぎで祭りの旅をしたイエスに関するヨハネの証言とは、このことで一致する。要するにイエスは、少なくともユダヤ人の標準的な大きさであつた。(94-95頁)。

《例2》は、シユタウファー著に記述されたイエスの容姿についての表現を、シユタウファー著の記述として引用し、遠藤著がイエスの容姿について想像している箇所である。イエスの身長や体つきを、「背のたかい、身体強健なもの」(遠藤著)に対して、「背の高い強健な人間」(シユタウファー著)と、同じと言つてよい表現形式によつて記述し、また、教師に対する当時

のユダヤ人の考え方について、同様の記述をしているので、文脈に大きな違いはないと言える。更に、シユタウファー著の④中の「幼いイエスの満足な成長に関するルカの記録と、しばしば大急ぎで祭りの旅をしたイエスに関するヨハネの証言とは、このことで一致する」という記述は遠藤著にはないが、遠藤著もシユタウファー著と同様、イエスの「身体的資格」を考える根拠を聖書に求めているため、二書の記述内容は一致していると見てよい。

しかし、先記したように、二書それぞれのイエス像は根本的に異なるので、その違いが表現のし方に影響したと考えられる部分がある。たとえば④中の「くのかもしれぬ」(遠藤著)に対して、「明らかにくはずである」(シユタウファー著)、「くであつた」(シユタウファー著)という記述がそうである。遠藤著の記述のし方は、弱くて悲しげで「無力」であるという遠藤著のイエス像を反映してか、或いはまた、聖書にイエスの容姿についての記述があまりないためか、「くのかもしれぬ」と、弱い表現のし方である。逆に、シユタウファー著の記述のし方は、遅しくて威厳に満ちたイエス像を反映してか、或いはまた、シユタウファー著の①④中に「こゝういふ結論は、ユダヤの反対者たちが黙認していることで確認される」、④中に「でなければ、反対者がイエスの外見に対して、攻撃をしないといふことはなかつたはずである」との記述が見られること、即ち、駁論的なユダヤ側の証言がないとの自信からか、断定的である。遠藤著は、冒頭における文末表現からして既に、弱々しげな、また、悲し

げないイエスに繋がるような記述にしている。つまり、二書では、イエス像や基本的姿勢が異なるために、文脈に僅かなずれが生じていると言える。

《例2》のように、文脈に僅かなずれを生じさせる程度の例を見つげ出すのは、《例1》と同様、難しい。理由は、二書におけるイエス像と二書における基本的姿勢や目的が異なるからである。たとえば、「イエスは（中略）ヨハネ教団のなかで洗者ヨハネの愛弟子」であったという遠藤著の記述（42頁）は、「イエスはヨハネのバプテスマを固守している間は、一般人にもヨハネの弟子たちにも明らかにヨハネの愛弟子であり、」というシユタウファー著の記述（102頁）を踏まえているものと考えられるが、その時期のイエスに、遠藤著は只管に「愛」を求める像を描写する（37頁）のに対して、シユタウファー著は「律法と律法的敬虔」さに徹する像を描写している（101頁）ので、二書ともにイエスが洗者ヨハネの「愛弟子」であることを記述している。つまり、根本的にイエス像が異なっているからである。つまり、語句の形や語句自体の意味は同じであっても、文脈においては明らかに違いがあるのである。そのように、二書におけるイエス像が根本的に異なるため、文脈が一致したり、僅かなずれで収まったりするような引用箇所は、少ないのである。

五 シユタウファー著からの引用のあり方（三）——語句の形や意味は変化していないが、文脈が変化している例——

次の《例3》も、《例1》、《例2》と同様、引用された語句の形や意味が変化していない場合の例であるが、《例2》よりも、文脈に変化が見られる例である。

《例3》

・遠藤著Ⅱ「①養父ヨゼフは大工だったが、イエスもまたその仕事を習われた。」（中略）大工といつてもその仕事は建物や家を建てるのではなく、むしろ細工師というべきもので、しかも②ガリラヤの大工の多くは巡回労働者だったから、彼も固定した店を持っておられたのではなく、③ナザレの町やその周りを求めに応じて歩きながら仕事をされたのであろう。貧しさ、生活の苦勞、働く男女の汗の臭いをイエスが身にしみて知っておられたことは、聖書に出てくる彼の譬話をよむとはつきり感じられる。（中略）

（中略）

巡回労働者として彼が毎日みたのは生活の辛さや貧しさだけではなかった。聖書のなかには惨めな不具者や病人が次々と出てくるが、そうした人たちはナザレやその周辺の至る所にも住んでいた。（中略）

（中略）貧しき者に神はまた天国を与えてはいない。病に泣く人に神は慰めを与えていない。」（12—14頁）

・シユタウファー著Ⅱ「イエスの初期時代（紀元前七年から紀元二七年まで）については、われわれはほとんど知らない。マタイによる福音書はエジプトへの避難について、ルカによる福音書は十二歳のイエスの宮もうでについて語る。この二つの

物語は、イエスに対する政治的脅威と、ヨセフの政治的事情への警戒心を明らかにする、興味ある光を投じている。イエスの父はけつして世を捨てた敬虔主義者ではなかった。(中略)

マルコによる福音書六章三節から、われわれは①「イエスがヨセフの仕事¹³⁷を学んだことを知る。②パレスチナ・ユダヤ人の大工は巡回労働者であつた。このことは、ユダヤ教の伝承がいろいろ論争的に酷評している、③イエスのエジプトへの仕事の旅と関係があるかもしれない。」(76—77頁)

《例3》では、①の部分は同じ、②の部分では「ガリラヤ」(遠藤著)に対して、「パレスチナ・ユダヤ人」(シュタウファー著)など、一部異なる記述となつてはいるが、文脈に影響するものではない。ただ、③の部分は、明らかに異なる記述である。シュタウファー著がイエスの初期時代についてはよく分らないと書いているためか、遠藤著はシュタウファー著にはない記述を想像力を働かせて書いている。イエスは巡回労働者であつたから、ナザレを中心とした各地をめぐる、社会的弱者や身体的弱者をよく目にし、イエスの心を苦しめたという記述は、遠藤著のみにある。遠藤著は、大工が巡回労働者であるならば、各地を巡回する際、イエスが様々な弱者とめぐり会い、その度に心を痛めたはずだと想像するのである。つまり、遠藤著はイエス時代の生活形態を、語句の形や語句自体の意味はそのままにして、シュタウファー著から引用するとともに、社会的弱者や身体的弱者に心を痛めるという遠藤著のイエス像を描くきっかけとして引用しているのである。だが、シュタウファー著は、大

工が巡回労働者であつたことが、イエスの内面をどのようさせたかということ¹³⁸を記述するきっかけとしてはいない。遠藤著はシュタウファー著の記述を引用して、イエスがどのような生活を送っていたか、イエスの内面はどのようであつたかなどを記し、イエスが「母のような同伴者」へとなつていく伏線を敷いているのである。

このように、語句の形や意味は変化していないが、文脈に変化が現われている例として、ヨハネ教団時代のイエスに「同郷ガリラヤ人のグループが結成されはじめた」という箇所(遠藤著、44頁)がある。この記述は、表現形式も語句自体の意味も、シュタウファー著に書かれたものと同様であるが、文脈が異なつてはいる。シュタウファー著は、右のガリラヤ人グループの結成を、イエスの「目だたない出発」として記述している(シュタウファー著、100頁)のに対して、遠藤著は、イエスが頭角をあらわし始めた現象の一つとして記述して(遠藤著、同頁)おり、文脈が変化していると言える。また、受難直前のイエスの北方への逃れの原因は「過越祭の日までは死ぬまいと決心されたから」という箇所(遠藤著、135頁)や、受難直前のエルサレム行きのイエスの態度を「皆の先頭を歩いた」と記述する箇所(遠藤著、138頁)なども、それぞれ「イエスは過越しに死のうとした」(シュタウファー著、149頁)、「イエスが先頭に立つて行かれた」(シュタウファー著、150頁)とあり、語句の形や語句自体の意味は同じだと言えるが、これらの語句が記された背景、文脈が異なつてはいる。北方への逃れも、先頭に立つてエルサレムに向かうの

も、シユタウフアー著はイエスが奇蹟を行うことが要因だとするのに対して、遠藤著はイエスが奇蹟を行えないことが要因だとしているのである。

このように、語句の形や語句自体の意味は同じであつても、文脈が異なっている箇所は多い。理由は、先記したように、二書におけるイエス像が根本的に異なり、また、遠藤著は、シユタウフアー著とは異なり、母の愛に満ちたイエスを強く主張することを目的としているためである。

六 シユタウフアー著からの引用のあり方(四)——語句の形は酷似しているが、語句の意味、及び文脈が変化している例——

次に示す《例4》は、語句の形は酷似しているが、語句の意味、及び文脈が変化している例である。長い引用となるが、語句の意味、及び文脈がどのように変化しているかを確認し、また、それにも関わらず、いかに文章構成は酷似しているかを確認するために必要な量である。

《例4》

・遠藤著Ⅱ「(前略) あれほどイエスをとりに囲んだガリラヤの群衆たちは①急速に熱狂的な興奮からさめつつあつた。②イエスは今や、彼等の眼には『期待はずれの預言者』としてうつりはじめていた。③『無かな男』『結局はなにもできぬ男』というイエスの新しいイメージが監視員たちの工作で少しずつ人々の心に植えつけられていた。そして④夏はやがて秋に移り、湖

畔の小麦島は黄ばむ季節になつた。

(中略)

監視員たちはナザレの町でもイエスに論争を挑んだ。彼等はイエスの説くことは神の使信ではなく、⑤悪霊の言葉だとさえ言いきつた。住民たちのなかには湖畔の町々の人々と同じように彼に奇蹟を求めてきた者もあつたが、その眼にはもう期待ではなくなつた。好奇心と軽蔑の色があるだけだつた。⑥奇蹟を行はぬイエスを見て、怒りにかられた彼等は彼を町の南にある岩山の断崖に連れていき、投げ落そうとしたのである。(ルカ、四ノ二十九)。

⑦聖書のところどころに書きちらされているこのナザレでの不吉な出来事をつづり合わせてみると、我々にはガリラヤ湖畔を去つたイエスがいかに⑧悪化した空気のなかで人々に迎えられたかが擱めるのである。⑨身内からもかつての知り合いからも反感と敵意をもつて見られたイエスの口から、
『狐にも穴がある。空の鳥にも巢がある。しかし人の子には枕するところもない』(ルカ、九ノ五十八)

どういふ悲しみの言葉が洩れるのを聞くが、それは我々に訴える切実な響きをもっている。(中略)

『この後は弟子たち多く退きて、もはやイエスと共に歩まざりき』

ヨハネ福音書六章六十六節のみが記録しているこの弟子団の崩壊はおそらくこの時期に前後するものであろう。今、彼につき従うのはおそらく少数の者たちだけだつたのかもしれない。イ

イエスは彼等に向つて、

⑩『汝等も去らんと欲するか』

と悲しげに問うたとヨハネ福音書は書いています。

(中略) イエスは彼等にとつても『無力なる男』結局は何もできぬ男』にうつつてしまつたのである。

(中略) しかし彼等はなぜかこの無力な師を棄てられなかつたのである。(中略) 今人々から見棄てられ、孤独で一人ぼつちのイエスからどうしても離れることはできなかった。イエスが無力にみえればみえるほどこの人を見棄てれば、そのあと、どんなに言いようのない悔いと寂しさが残るかを彼等は無意識に感じていたのかもしれない。

(中略)

とまれ、⑩この年の秋、イエスと彼等とは文字通り『枕するところ』もなく南部ガリラヤ(ルカ、七ノ十一)やツロとシドンの地方(マルコ、七ノ二十四、三十一)に流浪の旅を続けられたようである。⑫彼等が旅した地名もさたかではないのはおそらくこの時期の記憶が聖書作家たちの語り部たつた生存弟子たちにとつて、悲しい思い出たつたからであらう。イエスの内面の苦闘は弟子たちにも理解しがたかつたものだらうし、イエス自身も人々に自分が知られるのを避けておられたからである。(マルコ、七ノ三十六、八ノ二十六)。(中略)

人に知られざるこのイエス一行の放浪がどのくらい続いたのかはわからない。⑬彼等が南部ガリラヤやツロやシドンを経て、ふたたび湖畔に戻り、更に北のトランス・ヨルダンを歩きつづ

けたことはマルコ福音書にさすがに記載されているようだが、その旅には⑭彼等はまるで逃げていたようだつた』とシムタウファーがのべているようにかつての華やかさはもうなかつた。群衆はもう彼等をとり囲まず、町や村でも一行を迎える悦びの声はなく、時にはふり続く秋の雨に濡れ、時には泊まるべき家もない旅であつたのだらう。(101—111頁、⑯は二箇所に付しているが、同じ内容なので、同一番号にしている・注管原)

・シムタウファー著Ⅱ「紀元三二年の過越しの時は、イエスのガリラヤ伝道の絶頂点である(ヨハネ六・一四以下)。だが⑰たちまち、局面は急転回する(ヨハネ六・六〇以下)。イエスは過越しの祭りにはエルサレムに現われなかつた。(中略)そこで議会の新しい派遣団がガリラヤに現われた。そこでいつそう強化された反対扇動が現われた。人々はこの神をけがす者のろいを叫ぶのである。

イエスは、しばらくの間はなお、カペナウム地方に滞留していた(ヨハネ六・五九)。⑱四月には小麦畑は黄ばんでくる。⑳その頃、弟子たちが安息日に麦の穂をつみとつたことから衝突が起つた。イエスは彼らを戒めるべきであつた。ところが彼はそれを拒み、そのことでそそのかしたという責任を問われる。(中略)

イエスは背教の説教者である。しかも民衆は、いつも群れをなしてカペナウムから、ガリラヤやパレスチナの全土から、エルサレムからさえも、彼のもとに駆せ参じた(マルコ三・七、二〇)。(中略)。㉑すでにエルサレムの律法学者たちは、イエス

の奇跡活動を現場で諷べるためにカペナウムにやつて来ていた（マルコ三・二二以下）。彼らの見解では、イエスの悪霊放逐は事実である。同じように背教の説教も事実である。だから彼はにせ予言者であり、彼の奇跡は⑤悪霊の奇跡である。（中略）

⑧状況は、イエスにとつて、彼の親族や弟子たちにとつて、また彼に忠実であろうとするすべての人々にとつて、まったく⑧恐るべきものであった。そこで⑨イエスの母は、イエスを責任能力のないものと宣言して、イエスと同時に親族や友人全体を救おうという絶望的な考えを持つに至つた（マルコ三・二一）。しかしながら、この好意的なくりかえされた救助の試みも、すべて、失敗に帰してしまふ（マルコ三・三一以下）。

カペナウムの町は、この法律の保護外におかれた人間から大挙して離反することによつて、みずからを救つたのである。⑩この離反の運動は、イエスの弟子団の中までも深く侵入してくる（ヨハネ六・六六以下）。イエスはカペナウムを去つた（マタイ一・二三以下参照）。イエスに忠実でありつづける弟子だけが彼のもとに留まる。（中略）③エルサレムからの派遣員の扇動が、この場合ほど成功したことは他になかつた。イエスは不貞の私生児と罵倒され、自分を救ふことのできない恥さらしの魔術師と侮辱される（ルカ四・二三）。間一髪、かううじてイエスは、にせ予言者に石を投げようとする熱狂者たちから逃がれ去つた（⑥ルカ四・二三）。

（中略）彼は不名誉な逃亡によつてしか自分を救ふことができなかつた（ルカ四・三〇）。⑥奇跡を行なう者としての《無

かさ》に対する軽蔑は、きわめてユダヤ的なものである。（中略）ナザレの南方には、メギドの平野の上に《墜落の岩》といわれる有名な絶壁があつた。（中略）人々はそこでイエスをつきおとそうとはかつたのである。要するに、⑦マルコによる福音書六章一節以下とルカによる福音書四章一六節以下の伝承の断片は、⑧危険の多かつた後期ガリラヤ時代を写したスナツプ写真のようなものである。

このようにして⑩われわれは、イエスをこの夏の月日のうちに、時には南部ガリラヤに（ルカ七・一一以下）、時にはツロとシドン、地方に（マルコ七・二四、三一）、時にはふたたび湖畔やトランスヨルダンに（マルコ七・三一、八・二二）見いだすのである。⑫彼はそこでふたりの病人をいやしたが、いつもそのいやしについて語ることを彼らに禁じた（マルコ七・三六、八・二六）。彼はけつして人に知られようとしなかつた。⑬彼はまるで逃げてゐるようであつた。⑭《きつねには穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子にはまくらす所がない》と、イエスはルカによる福音書九章五八節に語つてゐる。（125—129頁）。

聖書の箇所を記述する⑥、⑦、⑧、⑨、⑩について、二書は一致してゐると言つてよい。たとえば、⑦の「聖書のところどころに書きちらされてゐるこのナザレでの不吉な出来事をつづり合わせてみると、我々にはガリラヤ湖畔を去つたイエスがいかにか悪化した空気のなかで人々に迎えられたかが掴めるのである」（遠藤著）に対して、「マルコによる福音書六章一節以下とルカ

による福音書四章一六節以下の伝承の断片は、危険の多かった後期ガリヤ時代を写したスナップ写真のようなものである」

(シユタウファー著) というように、取り上げる聖書の記述のし方が異なっている。二書が基としている聖書の箇所は一致しているのを見てよい。なぜなら、遠藤著は、シユタウファー著の詳しい記述を簡略化して引用している場合があるからである。

例えば、イエス受洗は「二八年の二月頃」(遠藤著、30頁) という記述は、パソコン写真データから、明らかにシユタウファー著によるものと考えられ、そのシユタウファー著は、イエス受洗の年代を「マルコ一・九」(100頁)、「ルカ三・一以下」などのほかに、ヨハネ福音書と共観福音書とを比較して決定している(以上、32頁)が、遠藤著は「聖書によると」(同頁)と記述するのみななのである。

だが、聖書と同じ箇所を引いていても、二書の文脈は異なっている。遠藤著のイエスは奇蹟を行えないことを要因として逃れているが、シユタウファー著のイエスは奇蹟を行えることを要因として逃れているからである。したがって、⑫中の、イエスたちの逃れが「悲しい思い出」だから、聖書作家たちによる地名の記述すらないのだからという遠藤著の想像に値するシユタウファー著の記述はない。また、イエスの「いやし」とその口止めについて、シユタウファー著は記述するが、遠藤著は記述せず、イエスが人に知られまいとしたという文脈が二書では異なる。

このような遠藤著の特徴は、⑨、⑩のように、聖書にはない

「悲しみ」、「悲しげ」という描写を遠藤著が行うことにも繋がつている。先記したエ・ラゲ訳『新約聖書』は、「イエズ、之に曰ひけるは狐は穴あり、空の鳥は巢あり、然れど人の子は枕する處なし、と。」(ルカ九・五八)の記、「イエズ、十二人に向ひ、汝等も去らんと欲するか、と曰ひしに、」(ヨハネ六・六八)の記であり、「悲しみ」、「悲しげ」という言葉の記述をしていない(エ・ラゲ訳『新約聖書』からの引用は、漢字表記において、できる範囲内ではあるが、そのままの表記としている。理由として、例えば遠藤著が多用する「棄てる」の漢字表記部分は、エ・ラゲ訳『新約聖書』によるものと考えられるなど、遠藤による記述の根拠を探る上で重要だと判断するためである・注管原)。遠藤著刊行時、既に刊行されていた山谷省吾、高柳伊三郎、小川治郎編『増訂新版 新約聖書略解』(昭和40年3月1日、日本基督教団出版部、以下、『増新 略解』と略記)や、遠藤著刊行後の発行である山内眞監修『新共同訳 新約聖書略解』(平成12年3月20日初版・同年10月1日再版、日本基督教団出版局、以下、『新共同 略解』と略記)も、イエスの「悲しみ」とは記述していない。「ルカ九・五八」については、「地上でのイエスの生活そのものが労苦に満ちたものであったことを示す」(『増訂新版 略解』、206頁)、「イエスは狐や鳥ですらねぐらをもつが、おのれが枕するところのない旅人であることを告げ、彼(第一の人・注管原)の志願を取り合わない」(『新共同 略解』、194頁)と解説している。「ヨハネ六・六八」については、「イエスは『十二弟子』に覚悟をきかれた」(『増新 略解』、282頁)と解説し、『新共同 略解』に解説はない。つまり、『略解』においても、遠

藤著のイエス像のような悲しみのイエスは明記されていないのである。

遠藤著からの引用文に記した④以外の部分は、すべて遠藤著のイエスが奇蹟を行えず、人々の求めるメシヤでなかったこと、即ち「無力」であることが原因で、⑧のように、イエスが「悪化した空気のかなか」に追い込まれたとしている。悪化した状況は身内からの敵視ともなつて現われている。そして、そのように奇蹟を行えないから、⑤のように、イエスは「悪霊」の「言葉」(傍点管原)しか吐けないのである。しかし、シュタウファー著からの引用文に記した④以外の部分は、シュタウファー著のイエスが、律法が定める安息日についても敢然とした態度をとつたことをきつかけとして、また、イエスは奇蹟を行うことを原因として、⑧のように、イエスの周囲の「状況」が「恐るべきもの」、「危険の多かつた」ものになつたとしている。また、イエスに対する身内の態度については、シュタウファー著は遠藤著と異なり、「好意的」としている。そして、シュタウファー著においては、イエスは奇蹟を行うことができるので、⑤のように、「悪霊」の「奇蹟」(傍点管原)と呪われている。例えば⑧の「悪化した空気のかなか」(遠藤著)、「状況は」「恐るべきもの」(シュタウファー著)、「危険の多かつた」(シュタウファー著)などのように、用いられる語句自体の意味は同様であつても、イエスの周囲の状況が悪化している原因は全く異なるのである。

他の異なる部分としては、④、⑩の部分がある。たとえば、「小麦島は黄ばむ季節になつた」(遠藤著)に対して、「小麦畑

は黄ばんでくる」(シュタウファー著)など、季節を表す語句が同様の場合でも、その季節そのものは一致していない。遠藤著は「小麦島」が「黄ばむ季節」を秋としているが、シュタウファー著は四月から夏にかけてとしているのである。イエス時代のツロヤシドンに、日本の秋雨に相当する気象状況があつたかどうか分からないが、日本の季節や気象状況を知る読者は、冷たい秋雨に濡れそぼるみじめなイエス一行をイメージするのではないかと推測することが可能である。遠藤著は、みじめで「無力な男」イエスを記述するのに、ふさわしい季節に変わつていく。

このように、二書のイエス像が異なるので、⑩においても異なるのである。こゝは、シュタウファーの書からの典拠であることが明記されているのだが、シュタウファー著の文言とは異なつて記述されているのである。つまり、シュタウファー著は「彼」となっているのに、遠藤著は「彼等」となっているのである。シュタウファー著のように「彼」とすると、イエスのみが逃げていることを示すことになるが、遠藤著のように「彼等」とすると、イエス一行が逃げていることを示すことになる。

「彼」と「彼等」。大差なく見えるかもしれないが、文脈に照らすと、その差は明瞭である。シュタウファー著は、唯イエスのみが奇蹟を行えるのであり、また、そうであることが要因となつて、イエスは追われる身となつていたのであるが、遠藤著は、イエスが奇蹟を行えず、また、そうであることが要因となつて追われる身となつていく。だから、シュタウファー著は「彼

等」ではなく、「彼」なのである。しかも、シユタウファー著は逃げていようであっても、その途上で「いやし」も行っている。遠藤著は秋雨と相俟って、奇蹟を行えないがために、みじめで人目を憚って逃げ延びる様で記述しているが、シユタウファー著は奇蹟を行えずに「かつての華やかさ」をなくしたイエス一行など、記述してはいない。

この《例4》については、全体の文脈がまったく異なっていること、しかしそれにもかかわらず、語句の用い方や文章構成は極めて酷似していること、つまり、シユタウファー著の文章構成を文脈としてではなく形として利用し、そこにシユタウファー著から得た語句を用いながら、遠藤著の文脈を嵌め込んでいることを指摘できるのである。

七 おわりに——《例1》と《例4》のまとめ——

《例1》と《例4》に示した具体例とそれに基づいた考察により、遠藤著がどのようにシユタウファー著を引用したり、活用したりしているかについて、一部ではあるが、具体的に示し、明らかにすることができたと考える。遠藤著は、「無力」なイエスを描出することを目的とし、シユタウファー著から遠藤著に活かせる資料を選別して、または表現を変えるなど工夫を施して、引用したり、活用したりしていると指摘することが可能である。二書と比較すると、イエスの年代記に処々異なる点が見られるものの、イエスやイエスの周囲に起こった出来事をひ

とまとまりにして比較すると、言葉の使い方や枠としての文章構成などが非常に似ているのである。その結果、全体的な文章の流れにも共通性が見られるのであり、遠藤は、シユタウファー著を常に手元に置いて、遠藤著を記述したのではないかと想像したくなるほどなのである。だが、先記した通り、二書においてはテーマや基本的姿勢が異なるので、イエス像はもとより、記述の細かな相違も散見する結果となっている。試みに、《例4》で引用した文章全体における書込み箇所比率を確認すると、約40行に亘る引用文の内、書込み箇所は約9行でしかなく、しかも、その約9行のうち、遠藤著に、イエスが奇蹟を行うことを原因とした文脈で活かされた行の総数は、0（ゼロ）である。つまり、イエス像、テーマや基本的姿勢が異なるため、書込みを施し、また、形式としての文章構成を利用して、シユタウファー著をそのままの文脈では引用していかないのだと言うことが可能である。

そのように、イエス像やテーマなどが異なるので、シユタウファー著が強調する事柄に関しても、遠藤著は記述していないのである。奇蹟に関して言えば、遠藤著は、主たる奇蹟であるパンと魚の奇蹟、カナの婚宴での奇蹟などについて記述しているが、単純に奇蹟のみを記すというのではなく、より現実的な解釈も付け加え、また、他の奇蹟については、記述を回避する姿勢を認めることができる。更に、イエスの神顕現の正式文に関して言えば、シユタウファー著がヨハネ福音書に着目して、イエスは「サマリヤで初めて、(中略)『わたいがそれである』」

と「自己証言」したとする(107頁、傍点シユタウファー)のに対して、遠藤は「同意しかねる」とし、その「最大の理由はこの部分が他の福音書では全く記述されていないからである」(以上、「聖書物語」(その十)、「波」昭和45年3月1日、37頁)としている。遠藤は、ヨハネ福音書にしか記述のないイエスの「わたしはそれである」という発言は、認められないと言っているのである。しかし、《例4》に引用した遠藤著の記述、即ち「『この後は弟子たち多く退きて、もはやイエスと共に歩まざりき』／ヨハネ福音書六章六十六節のみが記録しているこの弟子団の崩壊はおそらくこの時期に前後するものであろう」(103、104頁)という、多くの弟子たちがイエスから離れていったことについては、ヨハネ福音書にしか記述がなくても、認めている。このことから、遠藤著は、遠藤著のイエス像に合わないシユタウファー著の記述は、活用したり引用したりしないのだと指摘することが可能なのである。

遠藤著は、一貫して、「無力」なイエスを求め、それを描くことを目的として、シユタウファー著の表現を変えてみたり、内容を選択したりするなどして、引用や活用を行っている指摘できる。また、遠藤著は、裏切りさえも赦し愛するという母なる神イエスを描くために、イエスを「現実に無能な役たつた男」(219頁)と貶めるほどまでに表現し、また、皆から軽蔑され、裏切られるという構成にし、シユタウファー著とは遠く隔たったイエス像を、シユタウファー著を大いに活用しながら、形象したのである。

〔付記〕

本論執筆にあたり、長崎市遠藤周作文学館には、資料をご提供いただき、また、資料を活用することをご許可いただいた。記して、御礼を申し上げます。

(八女学院高等学校非常勤講師)